

制服男子、溺愛系

【和装男子・一条國臣の場合】

プロローグ

これは事故だ。

不意に重なった唇の理由を、私——梶唯花はそう結論付けた。

十年前——

彼の大学卒業を半年後に控えた、九月の末。いつものように部室で彼と一緒にオセロをしている時にその事故は起こった。

静かな室内に突然鳴ったスマホ。驚いた私が足を滑らせて、座っていたパイプ椅子とともにうしろにひっくり返る。

ふわりと浮いた身体。崩れるオセロの盤面。まるで助けを求めるように、無意識に伸ばした腕。目の前に座っていた彼がその腕を掴んで、私の身体をぐっと引き寄せる。

「あ……」

気がついた時には、彼の顔はもう目の前にあった。鼻先がツン、と触れ合う。掴まれた手首が、熱くて溶けてしまいそうだった。

しばらくそうやって見つめ合った後、彼は私の身体をさらに引き寄せる。そうして、唇が重なった。

「ん」

意味がわからなかった。どうしてこんなことになったのか、理解できなかった。

でも、それと同時に嬉しくもあったのだ。だって当時の私は、彼のことが大好きで、大好きで、仕方がなかったから。

彼が姉の許嫁で、将来自分の義兄になるということは理解していたし、叶わぬ恋だというのは承知していた。でもだからこそ、重なった唇に驚きながらも嬉しくて、瞳は潤み、涙を流してしまったのだ。やがて小さなリップ音を残して離れる唇。私は唇を撫でた後、涙で濡れた瞳を彼に向けた。

「今の」

その瞬間、彼がはっとして息をのむ。まるで自分がしてしまったことに、そこで初めて気がついたような顔だった。あるいは私の涙に驚いたか。

「悪い」

「どうして……?」

その質問に当時の私がどう返してほしかったのか、それは今でもよくわからない。『好きだから』なんて返答は、夢見がちな少女でもあるまいし、さすがに考えていなかっただろう。だけど、唇に

残る彼の感触に、まったく期待しなかったと言ってもきつと嘘になる。

「それは……」

彼はその質問に固まる。そして、私の顔を見ないように視線を落とし、数十秒何かを考えた後、絞り出すようにこう吐き出した。

「愛花に似ていたから、かな……」

彼から出てきた双子の姉の名前に、呼吸が止まった。同時に心臓が嫌な音を立てる。考えてみればそれしかないだろう。彼と姉は許嫁同士なのだから。

何を不相応に、わずかでも期待していたのだろうか。胸を踊らせていたのだろうか。

「そっか……」

下唇を噛むと血の味がした。さつきはもつと甘い味がしていたのに、それももう思い出せない。

あの頃からずっと、私は愛花の陰で生きている。

第一章 身代わりの婚約

『愛花のことで話があります。今年の年末は帰ってくるように。特に、二十六日は必ず家にいるようにしなさい』

年の瀬も迫り、会社も長期休暇に入ったとある日。唯花は久しぶりに訪れた地元の駅で、スマホの画面に映ったメールを見下ろしながら、ため息をついた。送り主は、もう半分縁を切った状態の母親だ。「今更、一体何の用だろう」

お互いに連絡をするのは九年ぶりだというのに『元気にしてる？』『最近はどう？』『なんて何いや、心配は一切ない、至極簡素なメールだ。あまりの簡素さに意味がわからず、『どうしたの？』『愛花に何かあったの？』と返信してみたが、案の定というかなんというか、質問に対する回答は返ってこなかった。返ってきたのは『いいから帰ってきなさい』と言う一文のみである。

「はあ……」

唯花は今日何度目かわからないため息をつきながら、必要最低限の荷物だけ入ったキャリアケースを持ち上げた。三段だけの階段を乗り越え、そのまま駅から出る。大型バスがいくつも並んでいるロータリーのタクシー乗り場に並びながら、彼女はふたたびスマホに視線を落とした。

（無視するわけにもいかないから帰ってきたけど、愛花、どうしたのかな……）

唯花は画面に映った、『愛花』の文字を指先でなぞった。その瞬間、愛花のおっとりとした笑みが脳裏に蘇^{よみがえ}ってくる。

愛花というのは、梶姉妹の『できるほう』だ。

勉強も器量の良さも対人関係も、二卵性とはいえ双子なのにもかかわらず、唯花よりも愛花のほ

うが一枚も二枚も上手^{うわて}だった。テストの点数で勝ったことはないし、楽器を弾^ひかせても、料理を作らせても、裁縫^{さいほう}をさせても、愛花はそつなく完璧にこなしてしまう。唯花がすぐに習うのをやめてしまった絵画では賞を取り、先生からは美大を勧められるほどだった。

だから梶姉妹の『できるほう』と言えば愛花で、それは二人を知る人達の共通認識だった。

親戚内でも、学校内でも、……もちろん家庭内でも。

「帰りたくないなあ……」

唯花はスマホのバックライトを落としながら、そう独りごちる。

実家にいた頃、家に彼女の居場所はなかった。両親は『できるほう』である愛花だけを溺愛し、それと同じだけの愛情を唯花には注いでくれなかったからだ。特別酷い^{ひど}扱いを受けてきたというわけではなかったけれど、比べられ『出来損ない』と罵倒^{ばとう}される日々は、それなりに辛いものがあった。そんな両親に嫌気がさしたのが高校二年生の秋。その頃にはもう進学する大学もある程度は決まっていたのだが、唯花はそれを蹴^きって地元から離れた大学を受験した。当然親の反対もあったが、見事合格。そしてなれば家出をするような形で、唯花は実家を離れることになったのである。

（でも結局、私は愛花を差し出して逃げたことになるんだよね）

共通の友人から聞いた話だが、愛花は両親の勧めた通りの大学に行き、両親の会社に入社したらしい。従順に、期待されるまま。

それが不満だったのかどうかは本人に聞いてないのでわからないが、唯花はそのことをずっと申し訳ないと思っていた。なぜなら、あの針のむしろのような家の中で、愛花だけは常に唯花の味方

だったからだ。

おっとりとした彼女がとりたてて両親に反抗するということはなかったけれど、それでも、彼女はずっと唯花の存在を認めてくれていた。同じ土俵に立つてくれていた。

それは当時の唯花にとつて、凄く大きな意味を持っていた。

(愛花に何かあったんなら、私がんばるとかしなくっちゃ……)

贖罪の気持ちも込めてそう思う。だからこそ、二度と足を踏み入れるつもりはなかったこの地に、こうしてもう一度帰ってきたのだ。

「今日、何があるんだろう……」

会社がなかなか連休に入らなかったたので、今日が母からのメールにあった二十六日だ。『家にいるように』と書かれていたあの日付である。

「なにもないといけどな……」

言い知れぬ不安を抱えたまま、彼女はやってきたタクシーに乗り込むのだった。

そうして一時間後。

唯花はなぜか知らない男性の前に座らされていた。しかも、愛花のワンピースを無理矢理着せられた状態で。

場所は、地元の間人ならば誰でも知っている高級料亭。隣には不気味なほど良い笑顔の両親がいた。(意味が、わからない……)

実家に帰った直後、唯花は何の説明も受けることなく、ここまで連れてこられた。ここに来るまでに両親からかけられた言葉は『もう、遅いじゃないの!』『これを着なさい』『いいから黙ってついて来なさい!』の三つだけである。これでは状況がまったくわからない。

(しかも、愛花もいないし……)

唯花は『愛花のこと』で呼び戻されたはずである。なのに、肝心の彼女は家のどこにもいなかった。彼女は一体どこに行ったのだろうか。

質問なんてさせてくれなさそうな雰囲気の間親を唯花はチラリと見た後、今度は目の前に座る男性に視線を移す。

男は三十代前半という感じだった。しかも、和服姿。通った鼻筋に、にこりともしない唇。感情の起伏が少なそうな切れ長の目に、濡れた烏のような黒髪。着物を着ているからか背筋がしゃんと伸びていて、それがちよつと唯花の目には威圧的に映る。

(つまり二人は、私をこの人に会わせなかったってことよね。——でも、あれ……?)

唯花は目を瞬かせた。知らない人はずなのに、妙な既視感があるのだ。

一番近いのは『似た人を知っている』という感覚だ。目の前に座る彼に重なるように、おぼろげな男性の姿が頭の中でちらつく。しかし、その『似た人』が誰なのか唯花はなかなか思い出せない。(もしかして、会社の人? ……いやでも、会社にこんな人いたっけ?)

同じ会社に勤めている人間を全員知っているわけではないが、こんなに顔の整った人はあんまり見たことがなかった。

(でも、他に男性の知り合いなんていないし……)

いくら首をひねっても、目の前の男に似ている人間は見つからない。

唯花が混乱しているのが伝わったのだろうか、最初に口を開いたのは目の前に座る男だった。

「久しぶりだな」

(久し、ぶり?)

まるで会ったことがあるかのような台詞に、唯花は首をひねる。その反応に、彼は少しだけ困ったような笑みを浮かべた。そしてふたたび口を開く。

「一条だ。一条國臣」

「一条って——」

名前を聞いてハッとした。唯花は確かに、その男の名前を知っていたからだ。

一条國臣、老舗旅館の五代目。唯花とは五つほど歳が離れていたので、今は三十二、三歳ぐらいのはずである。

彼の運営する一条庵は元々華族だった一条家の別邸を旅館として改築したもので、大正ロマン溢れる内装と、伝統の和風建築が特徴の老舗旅館だ。旅行のために泊まる旅館ではなく、旅館のために旅行に来る客が絶えない場所、KAJIツーリストにとってはどんな時でも絶対に予約が埋まってくる、ありがたい宿だった。つまり、KAJIツーリストにとってはお得意様中のお得意様である。目の前に座る彼は、そんな老舗旅館の次期当主。そりゃ、両親だってピリピリもする。

(最後に会ったのが高校二年生の時だから、もう十年も前の話になるのか……)

唯花が國臣のことを知っていたのには、実はもう一つ理由があった。

二人は学友だったのだ。正確に言えば、愛花を含めた三人は学友だった。

彼女達の通っていた栄智学園は、小学校から大学まで通えるエスカレーター式の私立学校。一般枠ももちろんあるが、基本的には幼稚園や小学校から私立に行ける、ある程度裕福な家庭の子達が通う学校だった。

その学校の天文部で、國臣と唯花は二年間をともに過ごした。

(あの頃は、家に帰りたくなくて、ずっと部屋に入り浸ってたな……)

小さな一室の、二人だけの天文部。正確に言えば幽霊部員があと三人はいたらしいけれど、彼らを見たことはほとんどなく、部屋ではずっと二人つきりだった。天文部だったのに天文部らしい活動は何一つせず、彼は部屋で本を読んでばかりだったし、唯花は唯花で勉強をしたり、友人に手紙を書いたり、國臣に付き合ってもらってオセロやチェス、将棋などをしてたりしていた。

(だからどこかで会ったような気がしたのか……)

唯花は目を瞬かせながら、國臣をじつと観察した。言われてみれば、面影がある気がしなくもない。ピンと伸びた背筋も、整った顔立ちも、アンニュイな表情も、思い返してみれば、全部十年前のままだ。当時の彼の服装は洋服だったし、本を読んでいる時は眼鏡をかけていたから、その印象が強かったのも気づかなかった要因だろう。

そして、もう一つ忘れてはならないことを彼女は思い出す。

(そういうえば、國臣さんは愛花の許嫁……のはずよね……)

KAJIツーンリストが、放っておいても予約がくる一条庵の予約業務を任せてもらっているところからもわかるように、一条家と梶家は昔から仲が良い。祖父や曾祖父の代から両家は交流があったようで、だからこそ愛花と國臣の結婚は生まれる前から決まっていた話だった。

(ま、私がい実際に國臣さんに会ったのは、高校生になってからだけだね……)

結婚相手である愛花とは随分前から交流を深めていたようだが、唯花はその場に一緒にいたことはない。最初に会ったのは校内で、名前を聞いて初めて、彼が愛花の許嫁だと知ったのだ。

「いい加減、思い出したか？」

そんな國臣の低い声で、唯花は現実引き戻された。そして慌てて頭を下げる。

「お、お久しぶりです！」

「元気にしてたか？」

「元気です！……たぶん」

十年前と変わらない低くて安定した声に、懐かしさがこみ上げる。けれど、気になるのはその再会した理由だった。

(愛花との結婚報告ってわけじゃなさそうよね……)

それならば、今ここに愛花がいなくてはおかしい。唯花は改めて辺りを見渡すが、やはり愛花の姿は見当たらない。部屋の中には唯花と両親、そして國臣の四人だけだ。

彼の正体がわかったぶんだけ深まった謎に、唯花は視線を彷徨わせる。そしてとうとう耐えきれず口を開いてしまった。

「えっと、……私ってどうしてここに呼ばれたんですか？」

絞り出したような小さな声に、國臣は大きく目を見開いた。まるでその問いが予想外だったかのような反応だ。

「言ってなかったんですか？」

彼の言葉は唯花の両親に向けてのものだった。その言葉に父親は額の汗をハンカチで拭いながら、「なにぶん、唯花の到着が遅れたものでして……」と理由を話さなかった言い訳をする。

「言ってなかったって、なに？ 私に関係あること？」

「それは……」

父親はしどろもどろになりながら、視線を彷徨わせる。どうにもはつきりとしれない。それだけ唯花に伝えづらい話なのだろうか。

狼狽える父親に代わって、彼女の問いに答えたのは母親だった。

「唯花、喜ばない。貴女は國臣さんの婚約者になったの」

「は？」

あまりの言葉に、呆けたような声が出てしまう。言葉は耳に入ってきているのに、ちゃんと頭で理解ができない。咀嚼ができない。

「どういうこと？ 婚約者？ 國臣さんって愛花の許嫁じゃなかったの？」

『あの人』って。貴女、國臣さんと部活で一緒だったんでしょ？』

「確かに一緒だったけど！でも、すぐく仲良くしてたとかそういうわけじゃないし！」

「國臣さん言っていたわよ。『もしかしたら、気が知れているぶん、愛花さんより楽かもしれないませんね』って」

「國臣さんが？」

先ほど会った彼ではなく、十年前の彼の姿が頭をかすめた。

あの頃の彼はいつも窓際に椅子を置いて本ばかり読んでいた。本のラインナップは小説からビジネス本まで様々で、唯花は勉強をする振りをしながら彼が何を読んでいるかを観察したり、その綺麗な横顔を眺めたりしていた。窓から差し込む光で、彼の輪郭と眼鏡の奥のまつ毛が際立つ。その光景は、ゾツとするほど絵になっていて、何度か見惚れてしまったのを今でも鮮明に覚えている。

「何がそんなに嫌なの？ 貴女にはもつたいたいぐらいじゃない？」

「そうかも、しないけど！ 私は——」

「本当に、貴女は反抗してばかり！ 双子なのに、愛花とは似ても似つかないのね！ 出来損ないなら出来損ないらしく、たまには親の言うことを聞いたらどう？」

古傷がえぐられる痛みに、言葉が出なくなる。

この家から出ていくまでは毎日のように、こんなことばかり聞かされていた。自分は出来損ないだと、愛花の出廻らしたと。自尊心は育つ前に潰されて、自己肯定感はずたづたと地べたを這いずり回っていた。親の元から離れて九年。やっと人並みに自分のことが好きになれたのに、たった一言で昔の自分

に逆戻りだ。

唯花は拳を握って自分を奮い立たせる。

「とにかく無理！ 愛花がいなくなったらんなら、結婚自体を取りやめればいいじゃない！ お母さん達から言えないなら、私が言ってくるから！」

そう言っただけから出ようとした瞬間、今度は父親が目の前に立ちはだかった。そして聞いたことのないような大声を上げる。

「お前は、うちの会社を潰す気か！」

「潰す気って……」

いつも気弱な父親のありえない剣幕に、唯花は一步後ずさった。

「今うちの会社は、一条さんのところだけが頼りなんだ！ なのに、康隆さんは近々國臣くんに全権を譲ると言っている！ もし、このまま國臣くんとの繋がりもないまま代替わりしてしまったら、もしかしたらうちは切られるかもしれないんだぞ！」

父親は血走った目を唯花に向ける。康隆というのは、國臣の父親のことだ。

ひるんだ唯花に父親はぐつと身を乗り出してくる。

「そうなった場合の責任を、お前が取れるのか！」

それこそ知った話ではない。K A J I ツーリストは今の唯花に関係がないのだ。そんなことで潰れるなら、潰れてしまえとさえ思う。

(だけど……)

会社には幼い頃にお世話になった社員さん達もいるだろう。小さな会社なので、全員が全員、親戚のおじちゃんおばちゃんのような感覚だ。小学生の頃は会社に行くとき、よくみんなが待ってましたとばかりにお菓子をポケットに詰めてくれた。それが嬉しくて、週に何度かはお菓子をもらいに、会社を訪れていた。

その時の彼らの嬉しそうな顔をかすめる。

ここで自分が拒否をしたせいで、彼らが路頭に迷うのは確かに避けたい事態だった。

「とりあえず、これは向こう側からの提案でもあるの。さっきも言ったけど、貴女に拒否権はないのよ」

父親と唯花の間に入った母親は凜とした声でそう言う。

「貴女、いい加減諦めて少しは親孝行したらどう？ 大体、愛花が出ていったのだから、貴女があなたの子にすべて押しつけて出て行ったからじゃないの？」

「それは……」

母親の言葉に唯花はぎゅっと拳を握りしめた。

確かにそれは考えていた。自分のせいで愛花は追い詰められ、家を出て行ってしまったのではないかと。唯花が十年間自由に生きていた間、彼女はもしかしたら自分を押し殺して苦しんでいたかもしれない。

それならば、愛花の失踪は唯花の責任でもある。尻拭いはするべきなのかもしれない。

唯花は唇を噛み締める。

「……わかった。とりあえず、婚約はする」

そう頷くと、母親は満足そうにフン、と鼻を鳴らした。

第二章 十年間のすれ違い

『ええ!? それで、あ的一条さんと婚約することになったの?』

「うん。まあ、一応ね。無事に結婚したとして、仮面夫婦一直線だろうけど」

唯花はビジネスホテルのベッドに大の字になりながら、友人の声が流れるスマホを耳にあてる。

電話相手は友人の双葉早苗だ。唯花が地元を離れてからはあまり会うことはなくなっていたが、学生時代はそれなりに仲良くしていた子である。明るくて、元気で、いつも人を笑わせてくれる、気のいいムードメーカーだ。

たまたまホテルに帰ってきたところで、共通の友人の結婚式に参列するかどうか早苗から連絡があり、その流れで地元に戻っていることを彼女に話したのだ。もちろんその理由も愚痴のような形で吐き出した。

降って湧いた友人の結婚話に、早苗は興味津々といった感じで声を高くする。

『一条さんって、あのクールで何考えてるかよくわかんない人でしょう? 女性人気はすごいけど、どんな美女に言い寄られても、にこりともせず追い返すっていう噂の……』

「早苗、よく知ってるね」

『まあ、一条さんと修二が仲良かったからね。私はそれ経由で少し話したことがあるって感じ？』
「……そうなんだ」

修二というのは早苗の幼馴染のことだ。年齢は確か、國臣と同じだったので三十二歳。

一般枠ながら、二人とも高校から唯花と同じ学校に通っており、修二とは早苗を通じて何度か会ったことがあった。

『でもさ、なんで唯花は一条さんとの結婚がそんなに嫌なわけ？ 一条さんかっこいいし、唯花も当時は仲良かったんでしょ？』

「そりゃ、悪くはなかったと思うけど……」

『それならなんで？ 向こうに恋人でもいるの？ それとも、嫌なことされた？』

「そういうわけじゃないけど……」

歯切れの悪い言葉に、早苗は『じゃないけど？』と続きを促す。

唯花は一つため息をついたあと、小さな声を絞り出した。

「私はちゃんと、私のことを見てくれる人と結婚したいだけ……」

そう言う唯花の頭に蘇ったのは、あの高校二年生の時に起こった例の事故だった。

唯花を助けるために伸ばされた腕。偶然触れ合った鼻先。意図的に合わされた唇。

高鳴る心臓。浮きたつ心。流れた涙。そして、直後に放たれた國臣の言葉。

『愛花に似ていたから、かな……』

唯花はその言葉に心臓が裂かれるような痛みを受けたけれど、彼はどんな思いでそれを口にしたのだろうか。あの日、惨めで苦しくてどうしようもなくて、歩きながら泣いたことなんて、彼はきつと知らない。

(あの頃からずっと、國臣さんにとって私は愛花の代用品なのよね……)

今回のことだってそうだ。何が『そういえば、愛花さんには双子の妹さんがいましたよね』だ。

馬鹿にしているにも程がある。それとも、二年間ずっと一緒にいた唯花の名前も、彼は覚えていないのだろうか。

『まあ、あまり思い詰めないでね？ 相談事ならいつでも聞くから』

「うん。ありがとう」

早苗の心配そうな声に、唯花は我に返る。思いの外心配させてしまったようだ。

そのまま早苗と一時間ほど雑談をして、彼女は電話を終えた。



そして翌日、唯花には早速、國臣との用事があった。結婚式のドレス選びである。会場を変えなかったので、結婚式は半年後。すごく急がなくてはいけないというわけではないが、準備はもう始めているほうがいい時期だろう。そう國臣に提案されて、渋々と応じた結果である。

「これとか、いいんじゃないか？」

「……わかりました。着てみますね」

貸衣装屋の一角で、唯花は國臣からいかにも愛花が好きそうなフリルのたくさんついたドレスを指差され、辟易して応じた。これまた愛花が好きそうな服を脱ぎ、ドレスに着替え始める。

本番さながらにコルセットを付け、カラーのドレスに袖を通す。貸衣装屋の店員は満面の笑みで手伝ってくれるが、唯花の表情は晴れないままだった。

（私の結婚式のはずなのにな）

身代わりだとしても、これは唯花の結婚式のはずだ。なのに、ひしひしと感じる、妙な疎外感。自分はこのにいるはずなのに、ここにはいない感覚が胸を占拠する。

（それもそうか。私は今、愛花の代わりとしてここに立ってるんだもんね）

國臣と会う時は、愛花の服を着ると両親から厳命されているのも、原因の一つなのかもしれない。唯花らしさが彼に知られて、結婚する前に破談になったら困るということだろう。

ため息をつくとき、心配そうな顔をした店員が「コルセット苦しいですか？」と声をかけてくれた。それに唯花は精一杯の笑顔で「大丈夫です」と応じる。

（似合わないな……）

目の前の鏡に映ったドレスを纏った自分を見ながら、唯花は一人、そう思った。

『お綺麗ですよ』と言ってくれる店員に『もうちよつと考えますね』とやんわり断りを入れ、唯花はドレスを脱ぎ、試着室から出てくる。それを迎えたのは、試着室の前にいた國臣だった。

「着て出てこなかったのか？」

「ちよつとイメージと違って……」

「そうか……」

そう答える彼女に、國臣は釈然としない顔で頷いた。

唯花だって、これが普通の結婚ではないとはわかってる。だから、できるだけ愛花が着そうなドレスを選ぶべきだと思っているし、彼の意向にもそわなければとも思っている。

けれど、多少は自分に似合うものを選びたかった。

（好みじゃなくてもいいから、愛花が着そうなデザインで、私が着ても変じゃないもの……か）

それが一番の希望だ。だけど、そんなドレスがあるのだろうか。

「他に試着してみたいドレスはないのか？」

彼の言葉に、唯花は壁一面にかかっているドレスを眺める。素敵なおドレスばかりで着てみたいドレスがないこともないのだが、そのどれもが愛花の選びそうもないデザインのものばかりだ。こんな機会なかなかないのだし、着るだけ着てもいいかなと思っただが、万が一『これだ！』と思うものに出会ってしまった場合、きっとそれを本番で着られなかった後悔のほうが残ってしまうような気がする。

「えつと、ドレスは今日決めなくてもいいんですよ？」

「ああ。別に今日じゃなくてもいいぞ。来月末ぐらいまでには決めたほうがいいが……」

「じゃあ、今日はここまででもいいですか？」

昨日の今日でまだ覚悟が足りないのかもしれない。目を置くと判断した唯花に、彼は気分を害すことなく、「それならもう出るか？」と提案してくれた。

「すみません。次はちゃんと決めますから」

國臣の運転する車の助手席に乗り込むや否や、唯花はそう言って小さく頭を下げた。

彼女のその行動に國臣は目を瞬かさせた後、ふっと優しい笑みを浮かべる。

「別に急がなくてもいい。結婚式なんて一生に一度なんだから、納得できるドレスが見つかるまで探せばいい」

「でも、國臣さんもお仕事休んで来てくださったのに」

「それは別に良い。うちは部屋数も少ないし、来てくださるお客様も変な人はあんまりいないからな。俺が出て行かなくてはならない事態にはなかなかならない」

それでも色々な仕事があるだろうに、彼はそれを感じさせないような笑みを浮かべる。

「それより、これから暇か？」

「え？」

「唯花が良いなら、食事でもしないか？ 話したいこともあるし……」

「唯花……」

十年ぶりのその響きに、唯花は呆けたような顔になった。

國臣はそんな彼女の表情に、首をひねる。

「どうかしたか？」

「いえ、ちゃんと名前覚えてくれてたんだあって」

名前を呼んだ。たったそれだけのことに、胸がジンと温くなる。正直、忘れられているものだとばかり思っていたからだ。

「当たり前だろ？ 俺は誰かさんみたいに、たった十年で人の顔と名前を忘れるような薄情者じゃないからな」

「……もしかしてその薄情者って、私のことですか？」

再会した時のことを言われているのだとわかって、唯花は口をへの字に曲げた。

國臣はハンドルを切りながら、くつくつと喉の奥で笑う。

「バレたか」

「——あ、あれは！ そっちが着物なんか着てくるからで！ 洋服だったら絶対にわかったと思います！ 眼鏡もしてなかったですし……」

「いや。俺が洋服だったとしても、お前は絶対に気がつかなかったな」

「そんなわけないです！」

気がつくのと、声を張り上げていた。まるで、十年前に戻ったかのようなやりとりに、声色とは対照的に胸が弾み出す。

「それにもし、私が着物着て現れたら國臣さんだって気がつかないと思いますよ！」

「そんなわけない」

「言うのは簡単ですからね！」

「俺がお前に気づかないなんてことがあるわけないだろ？ どこにいても、何年経つても、お前が目の前にいたら気がつくよ」

瞬間、胸が高鳴った。こんなもの、リップサービスだ。それはわかっている。わかっているのに、頬が自然と緩んでしまう。

國臣は赤信号で車を止めると、唯花のほうに手を伸ばしてくる。そして、彼女のゆるんだ頬を軽くつまむ。

「やっと、調子が戻ってきたな」

彼は唇の端を開けるだけの軽い笑みを浮かべたあと、頬から手を離し、車を発進させる。

(なんなのよ、それ……)

唯花は走る車の中で、つままれた頬をひとなでした。

ああやって頬をつまむのは、國臣の昔からの癖だ。痛いということはなく、本当に軽くつまむだけ。それで唯花が顔を上げると、彼はいつも嬉しそうに笑うのだ。

一度だけ、なんで頬をつまむのか聞いたことがある。すると彼は笑って『そのほうが、顔を見てもらえるだろ?』と言ったのだ。

つまり先ほど頬をつまんだのは――

(顔を見て欲しかったってことなのかな……)

そう言われれば、久しぶりに彼の顔を正面から見たような気がする。

昨日だつて顔は合わせていたけれど、記憶としては曖昧だし、何より愛花のことでそれぞれではなかった。過去のこともあるので、意図的に顔を合わせないようにしていたかもしれない。

「それで、この後は暇なのか？」

話を戻すようにそう言ってきた彼に、唯花は首を振った。

「あ、すみません。今日はこの後ちよつと用事が……」

「急ぎなのか？」

「そうですね。時間があるならそつちに充てたいですし……」

「……わかった。じゃあ、送る」

一瞬の名残惜しさを見せた後、彼はそう言ってハンドルを切る。

彼の向かおうとしている方向に、唯花は慌てて声を上げた。

「あ、すみません！ そつち方向じゃないんです！」

「ん？ 梶さんの家はこつちだろ？」

「あの私、今、ビジネスホテルに泊まつてまして……」

國臣は大きく目を見開く。意外というような顔だ。こちらに実家があるのに、別のところに泊まつているということに驚いているのだろう。

「あ、えつと。なんか急に帰ることになったから、部屋を用意できなかったみたいで！」

なんと答えるのが正解かわからなくて、唯花はそう苦笑いを浮かべた。

正直に『家に居場所がない』とは言えない。彼と一緒に過ごしていた十年前だつて、唯花は家の

ことを彼に愚痴ったことはなかった。一緒にいてくれる彼に『寂しい奴』だなんて思われなくなかったのだ。

唯花は國臣に悟られないよう、わざと明るい声を出す。

「でも、ビジネスホテルって結構過ごしやすいですよ！ アメニティもしっかりしてるし、のんびりできるし！ 親とかいるとどうしても気を遣っちゃいますから、すごく楽しいですよ！」

「そうか。……今日もそこに泊まるのか？」

「あ。今日は、今からです……」

「今から？」

怪訝な声を出した國臣に唯花は視線を下げた。

「実は、年末だから利用者が多いみたいで、一泊しか予約が取れなかったんです。荷物は駅のほうのコインロッカーに置いて。だから今から、ホテルを探さないといけない……」

最後のほうはしぼむように声が小さくなる。なんだか恥ずかしくなってきた。別にこのことに関して唯花が悪いことは何一つないのだが、それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。

「もしかして、今日入ってるという用事はそれか？」

「あ、はい。まだ泊まる場所の目処が立っていないので、どれだけ回るのかも見当もつきませんし、できるだけ時間はそっちに回しておきたいなって……」

インターネットの予約サイトでは、もうこちら辺一带のビジネスホテルはすべて満室だった。しかしこういう時でも、直接電話をかけるか、受付のほうに行けば、空いていることもままある。唯花

はそれを狙っているのだ。

でもだからこそ、どれだけ回るか見当がつかないし、時間が必要なのである。

「それなら、ウチに来るか？」

「ウチ？」

意味のわからない國臣の言葉を、唯花はオウムのようくり返す。

「部屋が余ってるんだ。唯花がそこでよかったら」

「へ？」

『『ウチ』って、もしかして、一条庵!?』

部屋が余っているということは、そういうことだろう。

「いやでも！ 私、そんなにお金ないですし！」

唯花は慌てて首を振る。一条庵は部屋数が少ない分、一泊の料金がすごく高い。それこそビジネスホテルとは比べ物にならない値段である。一泊二桁万円なんてのはザラで、繁忙期になると全室スイートルームか!? と言いたくなるぐらいの料金になってしまう。

「お金って。婚約者から金を取るわけないだろ？」

「え!? 婚約者……」

「違うのか？」

「いや、違いますけど……」

唯花は視線を彷徨わせ、逡巡した。正直、助かる。とてもありがたい。

ホテルを探す手間と時間が省ける上に、お金も節約できる。年末年始はこちにいる予定だったし、ずっとビジネスホテルの生活はキツイと思っていたのだ。ここで一泊でも浮くならありがたいことである。

(さすがに何泊するのは申し訳ないけど、一泊ぐらいならお世話になってもいいかな……)

それに、噂に聞く一条庵の客室がどうなっているかも知りたいという気持ちもある。

唯花は窺うような声を出した。

「えっと……良いんですか？」

「遠慮なんてしなくていい」

「それなら、……よろしくお願いします」

「ああ」

そうして、國臣にお世話になると決まったのだが……

「ここは……？」

「俺のマンションだが？」

「へ？」

たどり着いたのは一条庵ではなく、彼が住んでいるマンションだった。

唯花が呆けている間に國臣はドアの鍵を開けて、中に入っていく。

「自宅のほうは両親が住んでるからな。特に父とは仕事でも一緒だろ？ プライベートまでずっと

一緒っていうのは、さすがにこの歳になったらキツイからな。ここを借りてるんだ」

「そ、そうなんですわね」

どんどん廊下を進んでいく國臣に、唯花は慌ててついていく。

「広いところがいいなと思って借りたら、家族向けの物件でな。部屋も何個か余ってるから好きに使ったらいい」

「えっと……」

「どうかしたか？」

「もしかして『泊まらせてくれる』って言うのは、このことですか……？」

「他にないだろ？ 旅館のほうはもう満室だしな」

「あ……」

そうですよね、という感じだ。この繁忙期に一条庵の予約が埋まっていなはずがない。

(いやでも、さすがにいきなり家に誘ってくるとは思わないし……)

唯花は國臣のうしろを歩きながら、頬を引きつらせた。

マンションまでのこのことついてきてしまった今『やっぱりやめます！』とは正直言いつらい。

それに、宿が決まったという安心感から、食事も済ませてきてしまっていた。外も暗くなってしまうので、この状態で新しくホテルを探すというのは、結構現実味がない。

「部屋はそうだな、この部屋とかどうだ？」

彼がそう言って開けたのはリビングの隣にある部屋だ。ドアを開ければ、がらんとした何もな

六畳ほどの部屋が広がっている。

「式までちよくちよくこつちに帰ってくる予定だろう？ この部屋はいつでも使っていていいから」

「えっと、ありがとうございます」

正直、その申し出はともありがたいが、毎回毎回そんなことを頼むのは申し訳ない。明日からはきちんとホテルを取るほうが賢明けんめいだろう。

唯花は辺りを見渡しながら、先ほどから頭の隅すみに浮かんでいる疑問を口に出した。

「あの、さつきから気になってたんですが、ここっていくつ部屋があるんですか？」

「6LDKだ」

「六？」

「あと四つほど部屋が空いている」

「そりゃそうでしょうよ！」

なんだか広いな、とは思っていたが、一人暮らして6LDKはやり過ぎだ。唯花なんてワンルームで満足しているというのに、彼は一体、六部屋も何に使う気だったんだろうか。

何も言えずに固まる唯花に、國臣は振り返る。

「とりあえず、今日は疲れただろ？ 先に風呂でも入ってきたらどうだ？」

「お風呂？」

「ああ、その後少し話をしよう」

(どうしよう。とんでもないことになったかもしれない……)

唯花は言われた通りにシャワーを浴びながら、ぼーっと今後のことを考えていた。このまま予定通りに事が進めば、國臣と一晩同じ屋根の下で過ごすことになってしまう。部屋も別々だし、彼の性格上、絶対に何もしてこないとは思いますが、仮にも自分達は『婚約している男女』なのだ。万に一つぐらいは『もしかして』があるかもしれない。

「いや、ない！ 絶対ない！ たぶん……ない！」

頭を抱えながら、ぶつくさそう呟いてしまう。

彼との『もしかして』を想像するだけで、どうしようもなくいたたまれない気持ちになってしまう。しかもそれが嫌ではないところが、また嫌だった。

彼はどうせ、唯花のことを愛花の代わりとしてしか見ていないのだ。それなのに一線なんて越えたら、切なくて、苦しくて、どうしようもなくなってしまいうに決まっている。

彼が子供が欲しいのかはわからないが、唯花はできれば結婚してからも彼とはそういうことはしたくないと思っていた。

(だってしちゃったら……)

また彼のことを好きになってしまう気がする。

彼の性格だから、きつと優しく、丁寧な、女性を扱うのだろう。そして唯花は、腕の中にいる自分だけが特別だと錯覚してしまうに違いない。それなのにきつと、彼は『デリカシーなく、耳元で』『愛花』なんて唯花のことを呼んでしまうのだ。

そうだったら、後はもうただただ地獄でしかない。
そんな想像をして、身体が冷えていく。シャワーから出ているのはお湯のはずなのに、まるで冷水を浴びているかのようだった。

唯花が風呂場から出てくると、國臣はリビングのソファにいた。彼は十年前のように眼鏡をかけて本を読んでいる。彼は唯花の気配に顔を上げると、軽く微笑んだ。

「出たか」

「あ、先にいただきました」

「なんだかまた他人行儀になってるな。シャワーを浴びながら変なことでも考えたか？」

「それは……」

凶星を突かれて固くなる。どう答えていいか迷っているうちに、彼はソファの端に寄って、隣をポンポンと叩いた。座れということだろう。唯花はそれに従うように、彼の隣に腰掛けた。

國臣は隣に座った唯花のことをじっと見下ろすと、片眉を上げる。

「それにしても、唯花の部屋着はそんな感じなんだな」

「へ？」

そう言われて、唯花は自分の姿を見下ろした。今着ているのは、彼女が普段から着ている部屋着だ。学生の頃のジャージに適当なだぼとしたシャツを着ているだけの、大変にラフな格好である。

「あ……」

「それ、高校生の時のジャージだろ？ まだ持ってたのか？」

「……っ！」

唯花は思わず、服を隠すように自分自身を抱きしめた。

全身の血が沸騰して、毛が逆立つ。恥ずかしい。恥ずかしすぎる。どうしてのこのことこんな格好で出てきたりしたのだろうか。しかも指摘されるまで、唯花は自分がどんな格好で彼の前に立ったのか気がついていなかった。

（だ、だって、パジャマとして持ってきたの、これしかなかったし！）

唯花はそう自分自身に言い訳をする。

しかもこんなの、全然愛花らしくない。彼女ならばもっと女子力の高い、可愛らしいもこともことした部屋着を着るに違いない。こんなことになるとはまったく想定してなかったので、実家から持ってきた愛花の服は外行き用のものばかりだった。

「こ、これはっ！」

「なんだかそつちのほうがお前らしいな」

「……え？」

意外な言葉に素っ頓狂な声が出た。

唯花の慌てようが面白かったのだろう、彼は口元を手で隠しながら、笑みを含んだ声を響かせる。「昼間の服も似合っていないこともなかったんだが、なんだか唯花らしくないと思っていただけからな。

お前は『お嬢様』って感じじゃないだろ？」

「なっ……」

なんだかとても失礼なことを言われたような気がする。「『お嬢様』って感じじゃない」とはどういうことだ。ジャージが似合うというのも聞き捨てならない。

「私服がそうだからドレスもそっち系統がいいと思って提案したんだが、なんだかイメージとは違うし、想像してもしっくりこないし。実際に見たら違うのかなと思っただけなのに、お前は着て出てこないし……」

唯花は更衣室前で見た彼の釈然しやくぜんとしない顔を思い出す。

(あれって……)

そういう表情だったのか。唯花ははてつきり、『俺が選んだドレスを着て見せないのか』と不機嫌になっているのかと思っていた。

「十年前は制服姿しか見てないから想像でしかなかったんだが、ああいうお高くとまった服より、そっちのほうが俺の知ってる唯花らしい」

「そう、ですか」

結構失礼なことを言われている気がする。だけど、それが嬉しかった。彼が今日一日、自分のことをちゃんと見てくれていた証拠だからだ。

唯花は申し訳なき半分、嬉しさ半分という、不思議な表情で視線を下げた。

「あの。実はあれ、愛花の服なんです。クローゼットに残ってたのを借りて着ていたんです」
「どうりでな。でも、どうしてそんなこと……」

「私は一応、愛花の代わり、なので……」

國臣は大きく目を見開いて一瞬だけ固まると、妙に納得のいった顔で頷うなずいた。

「だからか」

「はい？」

「だから今日拗すねてたのか」

「……拗すねてたって……」

「拗すねてただろう？」

苦笑しながら彼はそう言う。言われてみれば、『拗すねていた』と評されてもおかしくない態度だだったかもしれない。けれど、そんな駄々だっ子こみたいに言われると、ちよつと腹が立ってくる。彼にとつては拗すねてるように見えたかもしれないが、彼女としては真剣に悩んで行動した結果だ。

唯花が不満を表すように唇をすばませると、彼はまるで子供にそうするように彼女の頭を撫なでた。

「でも、そうだな。これは俺が悪いか」

「……國臣さん？」

「悪かった。嫌な思いさせたな」

彼の親指が目の下を拭う。別に涙が零こぼれているわけでもないのに、なぜかその仕草まねごとに慰められた気がした。

「大丈夫だ。唯花は愛花の代わりじゃないし、俺もちゃんと唯花と結婚したいと思ってる」

「え？」

「だから無理に愛花になろうとする必要はない」
驚きが最初に来て、次に怒りが湧き起こった。

誰が、どの口で、そんなことを言うのだ。

「……嘘つき」

「ん？」

「そんなこと言いながら、國臣さんは私のこと愛花の代わりとしてしか見てないんでしょう？」

「そんなことはないぞ」

感情のままに吐き出した言葉を、飄々ウラウラとそうかわす彼が気に入らない。

唯花はさらに語気を強めた。

「じゅ、十年前、キスしたこと覚えてます!？」

「ん。忘れてない」

「あの時私になんて言ったのか、覚えてないですよね!？」

「覚えてる」

驚くほどはつきりそう言われ、唯花は「は？」と声なのか吐息なのかわからない音を漏らす。

『愛花に似ていたから』……だったかな

昔と変わらない声色こゝろいろでそう言われ、唯花は口をあんぐりと開けたまま固まった。そしてしばらく固まった後、わなわなと唇を震わせる。

「覚えてるならなんで……」

「あれは、最初にお前が泣いたんだろ？」

「へ？」

「泣きながら』どうして』なんて聞いてくるから、それほど嫌なのかと思って、……ごまかしたんだ」

「ごまかした……?」

確かに十年前のあの時、唯花は泣いた。だけどあれは、感情が高ぶってしまったがための涙だ。

嬉しくて、びつくりして、出てきてしまった涙。決して彼とのキスが嫌だったというわけではない。

「もしかしてあの言葉、ショックだったのか？」

「だって……」

当時、唯花は彼のことが好きだったのだ。だから、愛花の代わりにキスされたという事実にくしくショックを受けた。夜通し泣き続けて、翌日は学校も休まないといけないうらい目が腫はれてしまっ
たし、声も枯れてしまった。

でも今更そんなことは言えない。あれは十年前の恋心で、あの日あの時に、部屋に捨ててきたものなのだ。今の唯花は國臣のことなど、なんとも思っていない……たぶん。

「そもそも当時の俺は、愛花とあまり交流がなかったんだぞ？ 親に会えと言われた時に会っていただけだし。どうして愛花の代わりに、お前にキスをしないとイケないんだ」

「じゃあ、あの時のキスは……?」

「好きだったからに決まってる」

その言葉に、唯花は何も言葉が返せなかった。頭は半分以上思考を放棄しているし、残りの半分

は処理が追いついていない。でも、それでいいのかもしれない。心の底を漂うわずかな喜びに、唯花はまだ気づきたくなかった。だってもう、今更も今更だ。

「愛花がいなくなつたと知って、最初に思いついたのは唯花だった。代わりが必要なら呼び寄せてくれるかなと思って話を振ったら、案の定、お前は帰ってきた」

「……」

「正直、一目会えるだけで良かったんだ。こんなおかしい理由で呼び戻されたって知ったら、唯花のことだから怒ってすぐ帰ると思っていたいな。……だからまさか、結婚まで了承してくれるとは思わなくて、連絡ももらった時は、自分の耳を疑ったよ」

「それは……」

「わかってる。親に言われて、渋々了承したって感じなんだよな？ それか、姉妹としての責任、とかか？」

どちらも正解で、どちらも不正解だ。

本当に心から嫌な相手だったら、親に言われたって、愛花のためだからって、唯花は絶対に了承したりしなかった。唯花は昔からそういう性格で、そういうところも両親に面倒くさいと思われていたのだから……

（つまり、私が結婚を了承したのは……）

「——っ！」

唯花は自分で自身の両頬を叩いた。パシン、という乾いた音が、部屋に広がる。そして、そのま

ま彼女は勢いよく立ち上がった。

「きよ、今日はもう、疲れました！ 寝ます！」

唯花の突然の行動に、國臣は驚いたように目を見開く。そんな彼を視界に入れないようにしながら、彼女は先ほど使えと言われた部屋のほうにつま先を向けた。

「唯花？」

「これ以上ごちゃごちゃ考えてたら、変な結論にたどり着いちゃいそうなので、ちょっと一度頭を冷やしてきます！」

「あいな」

「今話しかけないでください！」

「だが……」

「頭冷やすって言うてるじゃないですか！」

「お前、床で寝るのか？」

「…………はい？」

唯花は怪訝な顔で國臣を振り返る。床で寝るとはどういうことだろうか。

「言い忘れてたが、この家にベッドは一つしかないんだ」

「へ？」

「とりあえず、あの部屋にベッドを買うまで、お前は俺の部屋で寝泊まりすればいい」
本当に彼は、いつも突拍子もないことを言う。

唯花が何も言えずに固まっていると、彼は続けて「安心しろ。なにもしないから」と口にした。「えっと……」

唯花は戸惑うような声を出す。それをどう信用すればいいのだろうか。確かに國臣は昔から紳士的な性格だが、若い男女が一つのベッドで眠って、何もないなんてことがあり得るのだろうか。と言うか、何もなかったら何もなかったで、それはちよつとシヨックである。

「それに、俺はここで寝るつもりだしな」

そう言って彼が指したのは自身の真下だった。正確にはソファの座面である。

「毛布ぐらいあれば、ソファでも何とかなるだろ」

「そ、そんな、悪いです！ それなら私がソファで！」

「男として、さすがにそれはできないだろ？」

彼はそう言っ事もなげに笑うが、家の主人を差し置いてベッドで寝るだなんて、どうにも良心がとがめる。

（だけど、一緒に寝るわけにもいかないし……）

唯花は額を押さえながら、頭の中の自分と何度も話し合いを重ねる。しかし、何度脳内会議を繰り返しても、一向に國臣も唯花も安眠できるいい案は出てこなかった。

「そうだ。明日暇か？」

「まあ、暇と言えば暇ですけど……」

脳内会議を一旦中断させて、唯花はそう答える。彼は懐から財布と、先ほど家に入る時に出し

たキーケースを取り出した。

「それなら明日、ベッドを買っておいでくれ。客用のだが、しばらくはお前が寝るんだから好きなものを選んできたら良い。俺は仕事だからな。それとこれは、合鍵だ」

手を取られ、クレジットカードとカードキーを握らされる。あまりにも軽い感じで、とんでもないものを渡してきた國臣に、唯花は飛び上がった。

「な、な、なに渡してきてるんですか!？」

「カードと鍵？」

「そうじゃなくて！ 簡単にこういうの、渡しちゃダメですよ！」

「そうか？」

「そうです！ それにクレジットカードって、本人しか使っちゃダメなんですよ！」

「そうか。それなら現金で……」

「ごめんなさい！ そういう意味じゃないです!!」

ふたたび財布を取り出してきた國臣の手を押しとどめる。國臣は唯花が何に慌てているのかわかっていない様子で、首をひねった。そんな彼に、唯花はさらに声を大きくする。

「こういうの簡単に渡して、泥棒に入られたり、お金盗られたりしたらどうするんですか!？」

「盗るのか？」

「盗りませんよ!？」

「ならいいだろう?？」

「いいだろうって……」

そこまで言われると、どう止めていいのかわからなくなる。國臣があまりにも堂々としているので、まるで間違っているのが自分のような気さえしてきてしまうのだから困りものだ。

「俺が俺の一存で、俺が信用している相手に俺の大切なものを渡すんだ。問題はない」

「ありますよ！ ……というか、6LDKの件もそうですけど、國臣さんって本当に昔っからそういうところがありますよね。天然というか、なんとというか……」

天然というよりは、大物という感じだ。彼はいつだって何に対しても大きくぶれることはないし、飄々^{ひょうぼう}と受け流してしまう。そういうところがとても魅力的で、素敵だと、学生時代は思っていた。

「いい加減にしないと、いつか絶対痛い目みい——」

『みますよ』と続けるはずだった言葉は、國臣が頬をつまんだことにより、中断された。

唯花が顔を上げると、彼は嬉しそうな顔で笑っている。

「やっとな」

「あ」

指摘されて初めて気がついた。頬が緩んでいる。唯花はあわてて自分の口元を覆った。指先に当たる自分の頬が熱を持っているのがわかる。

國臣は彼女の頭を一撫^{ひとな}でした後、風呂場に向かった。

「俺もシャワー浴びてくる。眠たかったら先に寝ていいからな」

そう言って去っていくしる姿を、唯花はじつと見つめることしかできなかった。



「それで本当に何もなかったの？」

「なかったわよ。國臣さん、結局ソファで寝たし……」

翌日、唯花は國臣に言われた通り、ベッドを買いに家具屋を回っていた。

そんな彼女の隣を歩くのは、双葉早苗である。ショートカットに、大きなクリクリとした目が特徴の女性だ。高校卒業以来会っていないので、実に九年ぶりの再会である。今は近くの幼稚園で、先生をしているらしかった。唯花がベッドを買うのにつき合ってくれている。

結局ベッドのお金は、一度唯花が立て替えておき、後で國臣が支払うという話になってしまった。唯花が寝るためのベッドなので彼に買わせるのはさすがに申し訳ないとは思ったのだが、『客間のベッドだから……』と結局は押し切られてしまった形だ。

唯花から昨晩の話を聞いた早苗は、両手で自身の頬を押さえた。

「でもいいなあ。両想いかあ」

「りよ、両想いって！ 私が彼のこと好きだったのは十年前の話で、今は何とも思っていないんだからね！ それに國臣さんだって『昔、私のこと好きだった』って話で、今はどうだかわからないわけだし……」

「でもさ、一条さんは、唯花と結婚してもいいって言ってるんでしょ？」

「それは、そうだけど……」

「つまりそれは、そういうことなんじゃない？」

「そ、そんなの、わからないじゃない！」

唯花はほんのりと頬を染めたまま、唇を尖らせる。

國臣の気持ちは、よくわからない。というか昔から、わかった試しがないのだ。彼はいつだって、飄々と唯花のことを翻弄する。そうやって翻弄されること自体は嫌いではないけれど、気持ちが見えないことは不安だった。

「そういえばさ。どうして唯花は一条さんのこと好きになったの？」

「え？」

「あ、今じゃなくて、十年前の話ね。……というか、何で天文部入ったんだっけ？ 唯花、別に星とか好きじゃなかったよね？」

「それは……」

星は嫌いだはないが好きでもない。テレビで流星群がやってくると聞けば、空を見上げるぐらいはするが、改めて夜に星を見ようと思っただけはあまりない。

「私が天文部に入ったのは、……誘われたからかな」

「誰に？」

「……國臣さんに」

そう言うて思い出すのは、やっぱり学生時代だった。

栄智学園の生徒は文武両道の精神のもと、初等部から高等部まで何かしらの部活動に入ることが義務付けられていた。したがって、初等部に入学する際と、初等部から中等部、中等部から高等部に上がる際、何部に所属したかを紙に書かされる。幅広い年齢が集まる学校のため、部活によっては年齢制限があったり、同じ部活に所属していても初等部と中等部ではやることは別々だったりするのだが、それでも大体、初等部から高等部まで同じ部活をやり抜く生徒が大半だった。

高等部に上がりたての頃、唯花は吹奏楽部に入るつもりだった。吹奏楽部は中等部の頃からやっていたし、知っている部活の仲間もいて安心できる。しかし唯花は、入部届提出三日前にそれを取りやめた。理由は、愛花が吹奏楽部に入ると聞いたからだだった。

愛花は中等部まで手芸部に所属していた。しかし、彼女が高等部に上がる際、人数が足りず廃部になってしまったのだ。そこで彼女は、双子の妹がいる吹奏楽部に入ることを決めたい。唯花がそれで吹奏楽部を諦めてしまうと少しも思わずに……

もちろん、愛花がいても吹奏楽部を続けるという選択肢はあった。けれど、愛花はコンクールで賞を取るほどのフルートの腕前がある。比べて唯花は、吹奏楽部でも中の中だ。レギュラーの選抜でもギリギリ選ばれる程度の腕前。

もし、家だけでなく部活動でも愛花と比べられたら……

そう思うと、とても同じ部に入ろうとは思えなかった。

それから、何部に入るか決められないまま入部届の提出の期限を過ぎ、唯花は案の定、先生に呼

び出しをくらったのである。

『吹奏楽部にしないのか？ ずっとやってただろう？ 今年からは姉もいるんだし、そこにすればいいじゃないか』

その先生の声に、唯花は何も答えられなかった。自分が吹奏楽部に入らない原因を愛花にしてしまいたくなかったし、たとえそれを言ったところで理解されなれどと思っただけからだ。

そうして三十分ほど、じつとつま先を見つめたまま先生の声を受け流し、先生の声にも諦めが滲み始めた頃、突然うしろから男性の声がした。

『彼女、ウチで預かりましょうか？』

振り返れば、二十歳にいくかいかぐらいの男性がいた。短く切り揃えられた黒髪は艶やかで、足も長く、顔もびっくりするぐらい整っている。

その男性の言葉に先生は困った顔をした後、『本当に入りたい部活がないのなら、一条のところにするか？』とわけのわからないことを言ってきた。

『一条のところ、つてどういうことですか？』

『天文部に入るか？ つてこと』

先生へと向けた疑問に、答えたのは背後にいる彼だった。

話を聞けば、彼はこの大学生で、さらには天文学部の顧問だという。大学生で『顧問』というのはおかしい話だとは思ったのだが、どうやら栄智学園では部活の顧問は先生でなくてもいいとのことらしい。なので先生の許可さえあれば、大学生でも部活の顧問になれるということだった。

確かに、吹奏楽部の顧問も実際に教員免許があるかどうかを確認していないし、野球部の顧問は元プロ野球選手だ。だからといって、大学生で顧問だなんて、本当にできるのだろうか。

一条と呼ばれていた彼は、『部室に連れて行きます』と言って、唯花を職員室から連れ出した。

彼女は何かだかわからないまま、彼についていく。

『あの、誘われたところ申し訳ないんですが、私、星にあまり興味はなくて……』

『いいんだ。天文部っていうのは建前で、実際はただの帰宅部だからな』
『え？』

『ウチは伝統的に帰宅部を置けないからな。名前を借りてるんだ。あ、本当に天文部に入りたい人間がいたら活動はするつもりだぞ。まあ、まだそんな生徒に巡り会ったことはないけどな』

とんでもないことを言いだした彼に、唯花は目を丸くする。

『そんな部が、うちにあっただね』

『二年ほど前からな。……実は、俺が作った』

『ええ!?』

唯花の反応が面白かったのか、前を歩く彼は声を上げて笑う。

『部活動に入りたくないって後輩何人かとな。俺も静かに本が読める場所が欲しかったし、先生達も実質の帰宅部を作ってたみたいで。まあ、利害が一致した形だ』

そう言って彼は、部室の扉を開ける。

『来たかったらいつでも来たらしい。ここは今日からお前の部室だ』

それが一条國臣と梶唯花の出会いだった。

「なんか運命の出会いって感じていいねー！ 素敵！」

早苗のはしゃいだような声に、唯花は現実へと引き戻される。

「素敵、かな……？」

「素敵よ！ つまり、一条さんにピンチを救われたってことでしょ？」

「ピンチってわけじゃなかったけど……」

でもそうだ。部活が義務付けられた高等部時代、放課後に行く場所をなくしてしまった唯花の居場所となってくれたのは、紛れもなく國臣だった。

早苗はさらにぐっと身を乗り出す。

「で、そこから唯花はどうして一条さんのことを好きになったの？」

「それは……」

唯花はそう口ごもった後、俯いた。頬が熱くなっているのが自分でもわかる。

「それは？」

「そ、そんなことより、ベッドを探さないと！」

「あ。はぐらかしたな」

「べつにいいでしょ！」

熱くなった顔をぶいっと逸らす。視界の端にはニヤニヤとした早苗が映っていたが無視をした。

こういう話はあまり得意ではないのだ。

その後、無難でシンプルなベッドを選んだ二人は、家路につくことになった。

「ところで、唯花ってお正月休み中はこのままずっと一条さん家の予定？」

「え？ うん。たぶん」

マンションに帰る道すがら早苗にそう聞かれ、唯花は一つ頷いた。

昨晩の國臣の様子を見るからに、彼はそのつもりのようなようだった。だからこそ『ベッドを買う』だなんて話になったのだから。それに唯花としても、もう少し彼の側において、昨日の話を続けた話を考えていた。

その返事に早苗はぐっと身を乗り出してきた。

「それならさ、お正月の初詣！ 一緒にいかない？ 一条さんも一緒にさ！」

「な、なんで!？」

「ダブルデートしようよ！」

あまりにも突飛な提案に、唯花はひっくり返ったような声を上げた。

「ちよ、ちよっとまって！ ダブルデートって！」

「私と思うに。二人に足りないのは、話し合う時間と、離れた十年を埋める思い出だと思うんだよねー」

早苗はしたり顔でふむふむと頷く。

「一条さん、修二とも仲いいし！ 私達となら気兼ねしないんじゃない？ もしかしたら、コレがきつかけで何か関係が前に進むかもしれないし！」

「それは……」

「それとも、ずっとこのままの感じで、結婚まで行っちゃうつもりでいるの？」

それは確かに嫌だ。彼の気持ちがちやうらに向いているか向いていないかぐらひは、はつきりさせておきたい。

そう唯花が頷きかけた、その時だ。

「こんなところで、何してるんだ？」

「へ？」

妙に聞き慣れたその声に振り向くと、そこには國臣が立っていた。仕事の最中なのか、再会した時と同じような和服姿だ。紺色の羽織がやけに人目を引く。寒いのか、手は組むように袖の中に入っていた。

「く、國臣さん!? どうしてここに!?」

「懇意にしてくださってるお客様のお見送りにな」

そう言つて彼はうしろを見た。歩道の側に黒い高級車が止まっている。客を見送つた後、唯花達を見つけて、わざわざ車を停めてここまで来たのだろう。

突然現れた國臣に早苗は顔を覗かせる。

「一条さん、お久しぶりです！」

「ああ君は、確か修二の……」

「はい。幼馴染やっています」

人の好い笑みを浮かべる早苗を見た後、國臣の視線はすぐさま唯花に戻つてきた。

「なんか『デート』って聞こえたんだが。唯花、誰かとデートでもする予定があるのか？」

「いや、それはあの……」

唯花は視線を彷徨させた。いつもより声が低くなっている辺りがちよつと怖い。

なんだかそんな反応されると、ヤキモチを焼かれているみたいじゃないか。

「実はですね、ダブルデートとかどうかかなあつて思いました！」

「ダブルデート？」

「はい。一条さんと唯花。それと、私と修二で！」

狼狽える唯花の代わりに説明してくれたのは、早苗だ。彼女はいつもの明るいテンションそのままに、國臣に計画を話していった。

「俺は別にかまわないぞ」

早苗の『ダブルデート計画』を聞いた後、國臣はそう頷いた。

唯花は驚きで目を見開く。正直彼は、こういうのが苦手だと思つていたからだ。

「いいんですか？」

「ああ、修二なら気兼ねもないしな。あと普通に結婚のことを伝えていなかった」

「あ、それ。私が伝えておきました！　なんか『俺に言わないとか、どうなんだアイツ』って怒ってましたよ」

「はは、らしいな」

國臣は砕けたような笑みを見せる。

早苗は、立ち並ぶ唯花と國臣の顔を交互に見ながら、手を叩いた。

「んじゃ、決まりですね！　また修二にも確認して、私から唯花に連絡します」

「ああ、わかった」

「えっと。……はい」

まったく口を挟む暇なく決まったダブルデートの予定に、唯花は楽しみのような、不安のような複雑な感情を胸に抱いていた。



國臣が、唯花のことを好きだと自覚したのは、初めて彼女の唇に触れた時だった。

まるで吸い寄せられるように、重なる唇。柔らかくてしっとりとしたその感触に、なんでこんなことになっているのだろうと逡巡して、自分は彼女のことを好きなのだ、やっとそこで気がついた。

それまで彼女は、國臣にとっていずれ結婚する人の妹だという認識でしかなかった。初めて声を

かけた時も、一緒に部室で過ごすようになってからも、ずっとそういう気持ちで彼女を見てきた。

でも、たまにする泣き出しそうな表情や、綻ぶような笑みがどこか放っておけなくて、特に読みたい本がない時でもいつも部室に行き、彼女の側にいた。そして側にいるうちに、彼女の事情も透けて見えて、それでも弱音の一つも吐かない彼女にだんだんと惹かれていった。

その気持ちが露わになったのが、あのキスだった。

唇が離れて、目が合う。呆然とする彼女の頬には涙が流れていて、唇を押さえる指先は震えていた。輪郭から離れた涙が、二人の間にある机に跳ねる。

そこで初めて國臣は、自分がとんでもないことをしてしまったのだと自覚した。

『今の』

『悪い』

彼女の小さな声に、それだけしか返せなかった。なのに唯花は『どうして……？』とさらに追い打ちをかけてくる。

本当はここで正直に自分の気持ちを吐露してしまえばよかったのだ。けれど、嫌悪の涙を浮かべる彼女にそんなことを言う勇氣はなくて、國臣は少し考えた後、こう口にした。

『愛花に似ていたから、かな……』

そう言うと彼女は目を見開いた後、『そっか……』と下唇を噛み締めながら小さく呟いた。彼女は、制服のスカートを握りしめて、精一杯頬を引き上げながら、続けてこう吐き出す。

『次は、間違えないでくださいね。愛花も傷ついていますよ？』

その苦しい表情の意味を、國臣は十年間、嫌悪だと思っていた。よく知らない、放課後だけに一緒に過ごしている男に、唇を奪われたことを気持ち悪がっているのだと。

(でももしかしたら、違ったのかもしれないな)

そう思うようになったのは、最近だ。

再会してからの彼女は、なんというか、國臣を嫌っているように見えなかった。

戸惑っていたり、何か思いつめたような表情を浮かべるようなことはあっても、彼女が自分のことを嫌がっているようには、どうしても見えなかったのだ。特に十年前の話を持ち出してきた時の彼女は、なんというか、凄く可愛かった。

『もしかしてあの言葉、ショックだったのか?』

『だって……』

その言葉を詰まらせた唯花の表情は、十年前の彼女の気持ちをいやというほどに表していた。

(両想いだったのか……)

傷つけてしまった当時のことを思い出して、申し訳ない気持ちになるのと同時に、なぜかそれが無性に嬉しかった。そして、彼女が帰郷するように仕向けた少し前の自分を、もの凄く褒めてやりたい気持ちにもなった。

唯花が今、國臣のことをどう思っているのか、それはわからない。けれど、悪いようには思われていないのではないかと思う。

だって――

「やっぱりこっちで寝ませんか?」

そうじゃなければこんな風に、ベッドには誘ってこないだろう。

唯花は先日買ってきたのだから真新しいパジャマ姿で、もじもじと指先を合わせる。國臣はソファの側でそんな彼女を見下ろしていた。

彼女と一緒に暮らし始めてから、三日が経っていた。

十二月三十日。年の瀬も年の瀬である。年末に頼んだベッドの配達は三が日以降になるらしく、まだ届いてはいない。なので、相変わらず寝室は彼女に譲り、國臣は今日までずっとソファで寝起きしていた。それがきつと彼女の良心にとがめたのだろう。

羞恥で頬を染める唯花に、國臣は揶揄うような笑みを浮かべる。

「誘ってるのか?」

「な、なんでそうなるんですか!」

「男をベッドに誘うのはそういうことだろう?」

その言葉に彼女は毛を逆立てながらも赤くなる。

「違います! 寝るだけです! なにもしません!」

「お前がしなくても、俺がするかもしれないぞ?」

「そ、それは――」

唯花は唇を震えさせた後、泣きそうな顔で俯いた。

「な？ 俺と一緒にいたら、安心して寝れないだろ？」

「それでも！ そのままだと風邪ひいちゃいますよ！ それに國臣さん、今朝から眠そうでしたし……」

「よく見てるな」

気づいていないと思っていたことを指摘され、思わずそんな言葉が漏れた。

眠たかったのはソファで寝ていたからではなく、遅くまで仕事をしていたからなのだが、彼女はどうやら自分のせいで國臣が寝不足だと思っているらしかった。

「私は、明日も休みだからいいですけど、國臣さんは仕事ですよ？ 私のせいでお仕事に支障をきたすのはあれなので……」

國臣は唯花の真つ赤になった耳をつまむ。瞬間、彼女は飛び上がった。

「ひゃっ！」

「赤いな」

「だ、誰のせいだと思ってるんですか……」

耳をつまんでいる手を振り払うことなく、恥ずかしそうな顔で睨めつける彼女に、背筋がざわざわした。
(可愛いな……)

このまま押し倒してしまいたい気持ちを理性で抑えつける。

潤んだ瞳はもつと泣かせてやりたいと思うし、赤い首筋には痕を残したい。生意気なことばかり

いう唇はずつと塞いでいたいし、そのくせ彼女のあられもない声は何時間だつて聞いていたい。

(再会してからずつとこんな感じだな)

数日前まで、彼女は國臣にとってただの思い出だったはずだ。忘れたいのには、忘れたくない思い出。なのにふたたび顔を合わせた今では、十年前と同じぐらい、いやそれ以上に彼女のが可愛くて仕方がなくなっていた。

「それなりに意識はしてくれた上で、誘ってくれてるってことか」

赤く火照る彼女の首筋を見ながらそう言った後、國臣は唯花を抱き上げた。

「ふおお!？」

変な声を上げた自覚があるのだろう、唯花は慌てて口を覆う。そんな彼女の仕草に、國臣はくつくつと喉の奥を鳴らした。

「そこまで言ったんだ。安眠のために抱き枕ぐらいにはなってくれるんだろう？」

「抱き枕……ぐらいいですよ？ 変なことはいしないでくださいね！」

「わかってる」

「変なことしようとしたら、な、殴りますよ！」

「それは怖いな」

「本当ですからね！」

そう言いつつも抱かれたままになっている彼女が可愛い。口をすぼめている顔は愛らしいし、自分の隣で國臣が安眠できると思っっている無自覚なところも憎めない。

立ち読みサンプル
はここまで

(こっちのほうが寝不足になりそうなんだが……まあ、いいか)
ちょっとぴり切なくも甘い夜を想像して、國臣は唇を引き上げるのだった。

第三章 初詣

『唯花が吹奏楽部に入らなかったのって、愛花が原因なのか？』
天文部に入ってから半年後、そう聞いてきた彼に唯花は目を瞬かせた。

窓のほうに向いていた顔を國臣のほうに向けると、彼は椅子から立ち上がりゆつくりと歩いてきて、唯花の隣に並び立つ。そして、先ほど唯花が見ていた方向を見つめた。彼女も做うように視線を戻す。二人の視線の先には愛花がいた。

彼女は吹奏楽部の仲間達と楽しそうにトレーニングに励んでいる。吹奏楽部は意外にも身体を使う部活で、腹筋背筋はもちろんのこと、週に一度は走り込みだっているのだ。そして、その日はまたまトレーニングの日の日だった。

『やっぱり、姉妹が同じ部活っていうのは気が引けるのか？』
『そう、ですね。ちよつと……』

國臣の質問に、唯花はそう言葉を濁す。
運動場で汗をふく愛花は、もう部活動のメンバーと打ち解けているようだった。もう誰も唯花が

いなくなったことを気にかけてはいないように見える。

(あそこにいたのは私なのにな……)

自分で出て行っておきながら、そんな風に妬むのは身勝手だろう。それはわかっている。だけど、当時の唯花はそう思わないとやっていられなかった。

『愛花が羨ましいのか？』

突然の質問に顔を上げる。見下ろしてくる彼の視線は優しく、それだけでなぜか少しだけ救われたような気になった。

『そうですね。ちよつと、だけ』

『……そうか』

それ以上何も言わない彼が優しいと思った。『途中入部したらいい』とか『愛花と話し合ったらいい』なんて言われた日には、きつとここにだっついていづらくなる。何も聞かない、何も言わない、その距離感がとてもありがたかった。唯花は愛花を囲うように、窓に円を描く。

『愛花って「愛」される「花」って書くんですよ』

『ん？』

『愛花らしい名前ですよ。……私とは大違い』

彼の優しさに触れたからか、唯花の口はいつもなら絶対に吐かない弱音を吐きだした。

ずっと思っていた。どうして愛花は『愛される花』で、自分は『唯の花』なのだろうか。双子なのに、どうしてこんなに違うのだろうか。